

でパストゥールが後進を励ます時に用いた言葉「トラヴァイエ、トラヴァイエ」は、正にその実践を表わすものであり、かつて衛生学校（エコル・ド・サンテ）のフルクロワが言った言葉「読むことは少なく、見ることを為すことを多く」は、フランス医学精神を強固に裏打ちしたものと見えよう。

最後の「失語症巡礼」は、ポール・ブローカ、マルク・ダクス、ジャン・パティスト・ブイヨアの三人が述べられている。がこの編で注目すべきは、本論とは別に、三人の足跡を探し求めようとした著者の心とその姿ではなからうか。そしていづれも共通するところは、著者がパリ留学中実際に訪れた医学史の旅のロマンである。そしてここに著者が言わんとしたことは、なるほど三人の足跡を巧みな文章で述べているが、いかに表現しても表現しつくせない著者の自分の追いつめぬ心を追いつめぬ激情に近い叫びであろう。彼等を育んだ町、学んだ場所、そして彼等の眠る土地に行き、そうしてそこに立ち、形なきものを見ると同時に、言わずして語りかけてくる声を聞くその行為自体は、いつわらざる著者の願いであるからだ。だから黒い髪をした日本人等みたくもない南仏の町ソミエールで、マルク・ダクスの生家を訪れた時の著者の言葉「まさに感無量であった。道をそれてここまでやって来た甲斐があった」は、著者の姿が目にみえるようで、フランス医学史を地で行く新鮮なロマンと香りと躍動感を感じさせる。

最後に若い医師にもぜひ読んでいただきたいのは「あとが

き」である。この本の上梓は、「この日本に、医者でありながらフランス語などを勉強するような人がいたのか」という著者自身の新鮮な驚きから発したのであり、結果的に本書は、著者が青春に出くわしたフランスとのかかわりの結晶といえるものではあるまいか。

（清水 陽人）

〔岩波書店・東京都千代田区一ツ橋二一五―五 電話〇三―三二六五―四一一、一九九一年、一九三頁・二〇〇〇円〕

松尾信一編・著『解馬新書の調査研究』

著者は信州大学農学部家畜解剖学教授でこのたび定年を迎えられ、本書は退官記念論文を兼ねての刊行となり、同学の徒として欣びひとしおである。

獣医史学は学会が設立されて二十周年、このため医史学会を兄として仰ぎ研鑽している次第であるが、一方個々の分野でも松尾氏の如く医史学との関連を保持しながら、秀れた業績をおさめている人々も多い。

蘭馬医菊池東水は江戸後期の嘉永五年（一八五二）獣医解剖書『解馬新書』を著わしているが、その表題の如く杉田玄白らが翻訳した『解体新書』の影響を受けていることは、序文の次ぎに記載する引用書目の筆頭に明記されている。しかしその内容は蘭学の素養師に優ると称された大槻玄沢が筆を加

えて文政九年（二八二六）に出版した『重訂解体新書』に拠っている。杉田玄白を盟主とする江戸蘭学者グループは長崎通詞派の阿蘭陀学を好まず（？）たとえば長崎大通詞今村市兵衛英生とH・J・ケイズルが幕府命により享保十五年（一七三〇）に全訳した蘭語版馬医学 *Parad Genesboek* の史実にも触れていない。このような状況のなかで大槻玄沢は蘭馬医学に深い理解を示し、蘭方馬医（蘭医蘭馬医と名乗っても、いずれも蘭学者たちの兼職であるが）との交流、更に『騙馬訳説』『西説伯楽必携』等の馬医学書も著わしている。

松尾氏は『解馬新書の研究調査』を次の順序で構成されている。

第一章、本文、内外諸図（解剖図）二十二葉、門人の追記（全編漢文）までの復刻（底本の写真版）

第二、第三章、本書刊行の頃（幕末期）の時代的背景から始まる松尾氏の長年にわたる調査追跡の記録

第四章、復刻された本文の内容解説

第五章、『解馬新書』が引用した文献は、次の十五書目となっている。

- 一、解体新書
- 二、医範提綱
- 三、眼科新書
- 四、眼科錦囊
- 五、解臟図
- 六、馬術叢説
- 七、馬経大全
- 八、施毛全集
- 九、相驥鑑
- 十、医馬驗穴度考
- 十一、驪黄物色説
- 十二、司牧安驥集
- 十三、調息伝
- 十四、西説伯楽必携
- 阿蘭陀馬書
- 十五、本草綱目
- 一六、附図

一、五、人体医学書 六、十四、馬関係医学書 十五、漢

方薬学書 である。

第五章の引用書目調査研究は、松尾氏がとくに力を尽くされている如く拝読した。十五部全巻ならびに附図等すべて底本の収集または所蔵本の閲覧（復刻写真を経ての解説であり、なかでも蘭書翻訳の『西洋馬術叢説』と『西説伯楽必携』、中国馬医学の名著として世界的に知られる『馬経大全』等は医学研究各位の御参考になる点多大であると考えられる。

世情騒然の幕末嘉永五年に刊行された、わが国初の単行家畜解剖書『解馬新書』は間もなく勃発した明治維新における近代獣医学教育導入方針のもとで、他の日蘭文献折衷で作られた江戸期の多くの書物と同様にその席を失うことになる。

しかも菊池東水の伝記はさらに暗く生年と没年が現在不明のままにおかれていることを知り、後輩として哀惜の念深いものがある。しかし松尾氏は東水は『解馬新書』の他に五編の馬学に関する論文を発表していると報告されているので、その一生は秀れた学究の人であったことを称えたい。

『解馬新書の調査研究』の結びは、著者が家畜解剖学専攻教授の立場から長年にわたり蓄積された資料史料を引用して家畜解剖小史を編纂され、東洋西洋の古解剖学を源流として世界の動物解剖学の歩みが明治初期まで興味深く紹介されている。種々の分野での医史学獣医史学の提携研究は、将来新しい史実の発掘を招来することもあり得るのではなからうか。このような願いをこめての本書の紹介ができたなら幸甚である。

(坂本 勇)

(日本中央競馬会馬事部・東京都千代田区虎ノ門四一三一
一城山J.T森ビル三二階、電話〇三―三五九一―五二五
一、一九九〇年、B5判・二五〇頁)

富士川英郎著『讀書閒適』

齡八十を超えてなお豊饒な著作活動を続けておられる著者の第三隨筆集である。初出が昭和五十年代の文章もあるが、大部分は元号が平成になってからのものである。

ここに収められた三十篇に近い文章の主題は、前二著と同様、多岐に亘っている。頁数から言っても、短いものは一頁から長いものは四十頁を越える文章までいろいろで、その中間に、寛いだ散策の趣を持った鎌倉随想や、医史学・漢詩文ほかに関係のある多彩なエッセイが位置していることになる。そして、右に挙げた最も長く読みごたえもあるのが、「森鷗外と富士川游」と題する論考である。

鷗外は富士川(著者はここで先考をこう呼んでいる)よりも三歳年長で、富士川が広島から上京して中外医事新報社員になった翌年(明治二十一年)に、ドイツから帰朝して間もなく陸軍軍医学校教官に補せられ、二十二年には「東京医事新誌」の編集主任になった。鷗外は直接間接に富士川と接触を持ちながらも、初期には彼のことを単に「中外医事新報記者」とのみ記録している。

著者は富士川・鷗外双方の記憶違いを訂正しながら、その頃からの両者の関係を丹念に跡づけるが、それは富士川が医史学者として顕れるに伴って変化して行き、やがて三十七年に出版された『日本醫學史』に、鷗外は「學者若シ此書ヲ編キテ富士川氏ノ眞ノ良史タル所以ヲ知ラバ又奚ゾ其ノ醫界ニ貢獻シタルコトノ大ナルヲ疑ハンは是ヲ序ト爲ス」で終る序文を寄せるに至る。一方で富士川は同書の奥書で「森博士ハ……又醫史學ニ精シク、早ク既ニ日本醫學史ノ撰著ニ手ヲ着ケラレタルコトアリ」と記したが、『鷗外全集』には鷗外が通史としての日本醫學史に着手した形跡は見られない。

ついで、著者は鷗外が陸軍省医務局長時代の大事業であった臨時脚氣病調査会への富士川の参画などを記述したあと、大正四年以降鷗外がその史伝の執筆に当って、富士川に問い合せの書簡を送り、また直接に訪問し、更には多くの資料を借覧した様子を、鷗外の日記・書簡や富士川の編著などに基いて明らかにしている。

この論考は、大正中期に小学生だった著者が、父君に伴われて乗った東京市電の中で鷗外と乗り合せて、二人が愉しげに談笑するのを見つめている場面で締めくくられている。その起筆が鷗外・富士川の双方を詠み込んだ川柳の引用であるのと相俟って、本来なら堅苦しくなり勝ちな論考を readable なものにする著者の配意をも見ることが出来る。また、本書を一貫する著者の文体は平淡で、修辭への苦辛の跡を留めないのがこの著者の修辭だと言いたいくらいであるが、この市